

ロンドンが J.A.Schumpeter のビジョンに与えた影響

小林 大州介 (北海道大学)

北海道大学大学院 経済学研究科

J.A.シュンペーターの経済学における独自の貢献であると考えられる、いわゆる『経済発展の理論』を構想するに至るまで道筋について、これまで様々な研究が行われてきた。

ウィーン大学においてシュンペーターは法学とそれに伴う歴史的接近法を学び、ローマ法。またバヴェルクやヴィーザーといったオーストリア学派第2世代の影響を受け、さらにバヴェルクのゼミナールにおいては、彼の教官とマルクス主義者との議論を聞いている。バヴェルクの生徒であった彼は、均衡理論としての経済学に興味を持ち、ワルラスに影響を受ける他方で、マルクス経済学の影響下にもあった(塩野谷 1996)。こうしたウィーンにおけるシュンペーターの知的環境に関しては、伝記や伝聞、シュンペーター自身の著作を基にして、様々な研究がなされている。エドワード・メルツはシュンペーター体系とマルクス体系との類似性やオーストリア学派の影響について言及(März 1983, 訳書, 第5章, 第8章)しており、また、八木紀一郎はウィーン大学におけるシュンペーターの履修リストを研究し、公表しているが、この資料はシュンペーターがウィーンにおいてどのような知的影響を受けてきたかを物語る資料である(八木 1993)。

他方で、シュンペーターが英国留学中にどのような刺激を受けたか、彼の発展理論形成にロンドンの研究者たちがどう影響を与えたかはあまり論じられてはいない。上記のメルツや八木はシュンペーターが英国の個々の研究者から受けた影響を個別に論じてはいるが、当時の英国の時代背景や知的風潮を踏まえた議論は行っていない。本報告者は当時のロンドンの知的環境がシュンペーターのユニークな理論形成において決定的な役割を果たしたのではないかと考える。よって本報告でシュンペーターが留学していた当時のロンドンの知的環境がシュンペーターの社会科学観や、『経済発展の理論』のビジョンの形成にどのような役割を果たしたかを詳しく論じることで、本研究の独自性としたい。

シュンペーターの発展観は多くの研究者が共有しているところであるが、静態と動態の分析、ひいては経済領域と非経済領域の相互関係を示すものである(塩野谷 1995)。この点についてシュンペーター自身が著作の序文(Schumpeter 1937)で認めているように、マルクスとワルラスという2人の経済学者の影響下にあることは間違いない(塩野谷 1995, 96)。では、シュンペーターの動的、非経済的領域についての研究はどのように形成されていったのであろう。法学やドイツ歴史学派、ロマン主義研究による、歴史的方法からの影響がある他方で、社会学や人類学といった分野からの影響も見逃すことはできない。ロンドンの知的環境を研究することにより、シュンペーターの経済領域以外の社会科学的なビジョン

がどのように形成されていったかがわかるのである。

シュンペーターがロンドンの研究者から受けた影響についての言及はメルツや八木がすでに行っている。メルツは、シュンペーターのエリート論において、当時の社会学的エリート論よりも、F. ゴールトンや K. ピアソンといった英国の研究者からの影響を認めている(März 1983, 訳書, 58)。また、八木はシュンペーターが、ロンドンにおいてピアソンや A. C. ハッドンや E. A. ウェスターマークらから学んでおり、「動機や意味理解に焦点をあてたジンメルやウェーバーといった主知主義的な社会学とは異なる」(八木 2004, 196)ことを指摘している。さらに、E.S.アナーセンはより詳細にシュンペーターの発展理論とゴールトンの天才に関する研究と、そしてその統計学的背景との関連を議論している(Andersen 2011)。上記の諸研究との差別化を図るため、本研究ではまず、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(以下、LSE)による社会学会(Sociological Society)に焦点を当ててみたい。

本報告者は前著において、ハッドンやウェスターマークら、ロンドンの人類学者がシュンペーターに与えた影響を論じた(Kobayashi 2015)が、個別の研究者の影響のみならず、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)の歴史的背景や、当時のロンドンの知的背景の考察はシュンペーターのビジョンを十分に説明するものである。ウィーン大学を卒業したシュンペーターが遊学した LSE は、当時設立間もない大学であり、1900 年にロンドン大学に加入し、1904 年には当時の英国では珍しい社会学部を持った。LSE の歴史を執筆した R. ドーレンドルフ(Dahrendorf 1995)によると、当時の英国は他国に比べて社会学の自立化が遅れており、人類学や進化生物学(優生学や生物統計学)、都市工学などの様々な学問の寄り集まりとなっていた。例えば、人類学における婚姻形態の問題はロンドンにおいても話題となっていたが、シュンペーターが留学する直前、統計学者であり同時に人類学者、生物学者であった多才の研究者、F. ゴールトンや人類学者ウェスターマークらが、雑誌 Sociological Papers においてこの問題を議論していた。この雑誌は当時ロンドン大学の一機関であった LSE の後援による社会学会(Sociological Society)が、その研究会の講義録を機関誌としたものである。1904 年に社会学部が設立されたと同時に、社会学会の定例会が、当時社会学に関心を持っていた様々な分野の研究者(人類学、優生学、生物統計学など)により開催され、機関誌は 1904 年からシュンペーターが遊学した 1906 年までの 3 年間の研究会を記録している。

婚姻形態の議論はこの会における大きなテーマの一つとなっており、この議論に参加した、ウェスターマーク、ゴールトン、そしてハッドンはみな、シュンペーターに少なからぬ影響を持った人物である。ウェスターマークとハッドンは 1906 年から LSE において社会学の授業を担当していたが、シュンペーターは双方の授業を同年の冬季に受講していることが分かっている。また、シュンペーターの最後の著作、『経済分析の歴史』においてゴ

ールトン¹を賞賛し、彼の定義する3大社会学者の一人として紹介している(Schumpeter 1954)。

1904年、Sociological Papers上でウェスターマークは、野蛮や未開における女性の地位が当時想像されていたほど劣悪なものではないことを論じたうえで、改めて早急な一般化を図る単線論的な発展論に異を唱え、原始一夫一妻制を論証する。1905年の同紙においてはゴールトンが、制度による婚姻制限の可能性を優生学の見地から論じている。この報告の討論者として、ハッドンとウェスターマークが名を連ねていた(Sociological Papers 1904, 1905)。

報告者はこの3名がシュンペーターの発展理論形成に重要な役割を果たしたと考える。シュンペーターはロンドン遊学の直後に著した『本質と主要内容』において、純粋経済学では扱えない「経済学の領域外にある事物」(人間性、地理的条件、技術、社会組織の変動)の影響を認めている(Schumpeter 1908, 訳, 297-8)。これらは純粋経済学が扱う静学に対して、その与件を変更する“動学”として、経済学外の領域の知識の援用を認めているように見える。しかし経済学とは他の領域の知識を使う際に、それらの問題に精通してなくてはならず、「学問の現状から二、三百年遅れているような主張」をすることは「許しがたい」と述べた(Schumpeter 1908, 訳, 272)。報告者は2015年、論文“Schumpeter as a Diffusionsit”において、当時時代遅れであった進化主義的な単線的発展論批判をシュンペーターが行おうとした、ということを経験したが、こうした決定論的な発展論が当時マルクスをはじめとする多くの経済学者に支持されていたことを考えれば、当時最先端であった人類学的な議論が行われていたロンドンにおける Sociological Society の重要性は明らかである。また、アナーセンも議論しているが、ゴールトンに関しても、シュンペーターが動学の理論化において影響を受けたのは明らかであろう。『経済分析の歴史』において、シュンペーターは考古学や民族学的研究の方法を「社会学における歴史的方法」(Schumpeter 1954, 訳, 下巻, 65)という言葉を使って表現しているが、発展理論の歴史的方法論を探していたと思われるシュンペーターにとって、ロンドンの人類学は動態に関する理論的基礎を与えたのではないかと推測される。こうした社会的な方法は、チェルノビツにおける彼の素人向けの社会学講座にも表れており(Schumpeter 1910)、この研究プロジェクトは1927年の社会階級論へとつながっていった。

LSE社会学部の開設においては、ウェスターマークと同様に、LSEで社会学を教えたL.T. ホブハウスが、その演説において「社会学の統合」について語っており、また Sociological Society の Introductory Address を務めた James Bryce もまた、英国の社会学の遅れを嘆くスピーチの後に、この会の設立として、様々な応用分野で活躍する研究者の理論的統合を訴

¹ ゴールトンの優生学的方法については「まったく不適切な方法」という注釈をつけたいうえで「自然と養育という諸問題と取り組んだ」という一定の評価を与えている(Schumpeter 1954, p.791)。

えた。

こうした理論的統合は、シュンペーターのビジョンとして塩野谷が挙げる「総合的社会科学」(塩野谷 1995)や、『経済分析の歴史』の中でシュンペーターが社会学として挙げる諸領域のイメージに、より近い。E. シュナイダーも著作で指摘しているが、シュンペーターはオックスフォードやケンブリッジといった大学を含めた英国における学問的環境を気に入っていたという(Schneider 1975, English translation)。ロンドンで得た学問的知識は、彼のその後の理論的ビジョンを決定づけたのではないかと報告者は推測する。

参考文献

- 塩野谷 裕一, 1995, 『シュンペーター的思考：総合的社会科学の構想』 東洋経済。
- 八木 紀一郎, 1993, 「シュンペーターとウィーン大学」『経済論叢別冊－調査と研究』、5号、63 - 83。
- 八木 紀一郎, 2004, 「シュンペーターと社会進化論」『ウィーンの経済思想』 ミネルヴァ書房, 195-217。
- Andersen, E.S. 2011, *Joseph A. Schumpeter: A Theory of Social and Economic Evolution*, Palgrave Macmillan.
- Dahrendorf, R., 1995, *LSE: A history of the London School of Economics and Political Science*, Oxford University Press: New York.
- Kobayashi, D., 2015, “Schumpeter as a diffusionist: a new interpretation of Schumpeter’s theory of socio-cultural evolution”, *Evolutionary and institutional Economics review*, 12(2).
- März, E., 1983, *Joseph Alois Schumpeter, Lehre, und Politiker*, 日本語訳『シュンペーターのウィーン：人と学問』、1998、杉山忠平監訳、中山智香子訳、日本経済評論社。
- Schneider, S., 1975, *Joseph A. Schumpeter : Life and Works of a Great Social Scientist*, translated by W.E. Kuhn, Bureau of business research, University of Nebraska-Lincoln 1975, BBR monograph, no 1.
- Schumpeter, J.A., 1908, *Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Leipzig: Dunker & Humblot. 大野忠男、木村健康、安井琢磨訳、1984『理論経済学の本質と主要内容』上下巻、岩波文庫
- Schumpeter, J.A. (1910) “How does one study social science?” *Society*, 40, 2003: 57-63, translation by Jerry Z. Muller of parts of *Wie studiert man Sozialwissenschaft*, in *Shriften des sozialwissenschaftlichen akademischen Vereins in Czernowitz*, Pardini: Chernowitz, 1910.
- Schumpeter, J.A.(1927[1991]) “Die sozialen Kllassen im ethnisch homogen Milieu” English edition “Social classes in an ethnically homogenous

environment”, in Swedberg, *The Economics and Sociology of Capitalism*, [1991]: 231-283 .

Schumpeter, J. A., 1937, Preface to the Japanese Edition of *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. 日本語訳『経済発展の理論』序文、中山伊知郎訳、岩波書店。

Schumpeter, J. A., 1954, *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press.

Sociological Society 1904-1906, *Sociological Papers*, Macmillan & Co., Limited: New York.